

回車椅子

中里恒子



回 転 椅 子

中
里
恒
子

文藝春秋

回転椅子かいてんいす

昭和六十一年十一月十五日 第一刷

定価 一二〇〇円

著者 中里恒子

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三

電話 (〇三)二六五―一二二

印刷 本文 理想社印刷 附物 大日本印刷

製本 中島製本

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

© Tsuneko Nakazato 1986

Printed in Japan

ISBN4-16-309260-9

回
轉
椅
子

装丁 題字 装画
竹内和重 著者 芹沢銈介

一

ま夏の朝のきれぎれの白い雲が、海上を蔽っている。

雲が晴れると、かっと暑くなる。また今日も暑い日が続くと思いながら、奈保子は、裸の足の裏に、まだ日光を吸わない砂の冷たい感触に、快感を覚えていた。

波うちぎわに、くつきりと足跡が残る。

奈保子の子供の足は、南京豆のように不揃いである。どんどん駆けてゆく曲りくねった足跡を辿って、奈保子は、なぞっていった。

波が足元を凌^{さら}った。足跡は消えて、しめった砂はなめらかな布のようになる。

子供を追って、奈保子は、渚に足をひたして歩いた。そばから波で足跡は消える。

それは、やってもやっても出来ないものの象徴のようであった。しかし、足跡は、濡れた砂にくつきり押される。

「わっわっ」

子供の声に、うつむいて足跡を見つめていた奈保子は、駆け出した。同時に、反対の道を歩いていた男が駆けていって、洋次を抱えあげた。男の方が、子供に近い場所にいたのである。

「洋ちゃん、洋ちゃん、」

奈保子は、濡れた洋次を抱えている男に、

「ありがとうございます、うっかりいたしました、洋ちゃん、着替えなくちゃあ、」

子供は、男の手を離れずに言った。

「大丈夫だよ、」

「いいえ、だめよ、ほんとに相すみません、海へはいるのが好きな子で、」

「うちにも子供がいますから、着替ぐらいあるでしょう、そこで、その会社の寮にいます、」
濡れた子供の手をひいて、男は歩き出した。洋次が、おとなしくついてゆくのが、奈保子は、腑に落ちない。

海ぎわの階段を上って、庭へはいると、

「おい、ちょっと来てくれないか、」

「なあに、」

若い女性が、袖なしの太い腕を出したぴちぴちした姿で、出て来た。

「なんでもいいから、乾いた着替を出して、このお子さんにさ、海で、ころんだのだよ、」

奈保子は、申しわけありません、御主人さまに助けて頂きました、と、お辞儀をしながら言った。

「あら、どこへいらしたかと思ってたわ、朝食が出来てますのに、お散歩だったのですか、」

あきらかに、不機嫌の様子である。

奈保子は、

「よろしいのでございます、お手数をかけました、」

洋次の手をひいて、立ち去ろうとした。

「……お近くにお住いですか、」

「いいえ、夏の間、祖母の家に滞在しておりますので、子供が、海が好きで、毎朝、砂地を歩きます、」

「そう、お珍しいのね、」

「おい、早くなにか乾いたものを、」

「はいはい、」

婦人が奥へはいったとき、奈保子は、お辞儀をして、洋次を抱えると、さっと駆け出した。男は立ったまま、

「却かえってすみませんでした、」

と言って、見送っている。

「あら、お帰りになっちゃったの、へんな方ね、あなたがお連れしたのでしょうか、」

「ああ、」

「どこのお宅かしら……とにかくお子さんのお躰はむずかしいわね、おばあさまも御一緒だな

ると、」

「よしなさい、よけいなことだ、」

「だって、そのよけいなことを、あなたがなさったのよ、」

「……」

無言で食卓につくと、トーストを一枚食べただけで、男は椅子を立った。

「あら、お食後もとらないの、」

男は黙って、新聞をひろげている。

「わたしも、実家へ行って来ようかしら、山ですもの、虫の種類は多いし、子供の宿題にも役立つし、わるい子もないし、勉強に集中出来ますからね、」

「ああ、」

「あなた、まるで関心がないのね教育について、わたしひとりでは、世話が焼ききれない、言うことはきかないし、」

「君の躰がわるいのだ、」

「なに仰^{おっしゃ}有^あるの、PTA役員ですよ子供の教育の相談役よ、」

「……」

「あなたは、一度も出席しないわ、熱心なお父さまもいらっしゃるのよ、躰がわるいなんて、よく仰^{おっしゃ}有^あること、」

「熱心な教育ままというのも、教育ばばというのも、御苦労なことだが、それだけで子供がよく

なるかね、」

「いま、波に足をすくわれたお子さん、礼も言わずにいつてしまったわ、躰がなってません、」

「いや、僕にはありがとうと、子供も、母親も言った、」

「あんなひとたちの肩をもつのですか、乾いた着替を出せなんて、あなた、お知りあいなのか、」

「いや、知りあいでなければ、親切にしないのか、」

妻の顔は、紅潮していた。良人の言い分が気に入らないのである。

「土地のひとつではなし、なにも会社の寮へ連れて来るほどのことではないわ、寮をあずかっているのは、父の会社だからですよ、わたしの小さい時から、ここは別荘だったのよ、」

「それがなんだ、今は、みんな社員の休養の場所になっている、僕たちも、同じように、ここへ泊っているだけだ、」

「いいえ、この寮は、わたしの家だわ、」

「まあ、そう言いたいのなら、そうしておこう、しかしね、いいじゃあないか、濡れた子供を、早く乾いた衣類に替えてやりたいと思った、それだけのことで、あの母親は、遠慮していた、だから、僕が、勝手に連れてきただけなのだよ、」

妻のあけみは、黙って、良人を見つめていた。

「さあ、もう済んだことだ、」

良人の言葉に、あけみは、近づいて椅子にかけた。

「それほど他人のことに気がおつきになるなら、わたしたち家族にも、気をつけて頂きたいわ、」
「つけてます、」

「いいえ、冷淡だわ、いつかそのことで、わたし、話しあいたいと思っていたの、」

良人の方は、うんざりした表情で、黙ってしまった。あけみは、尚も、言い募った。

「うちの猛が、自転車をやその女の子にぶつけたとき、そりゃあ、猛の不注意ですけれど、女の子の家へ、わたしも子ども謝罪にゆかせて、傷がなおるまでお世話をして、新しいスカートまでさし上げたわ、ちょっとの、かすり傷なのに、それ以来、猛の自転車を禁じたじゃありませんか、冷たい父親だわ、」

その時、良人の藤井は、微笑していた。

「わるいことをしたら、あやまる、つぐなう、それを覚えさせる為に、自転車はとりあげた……
猛は、悪いことをしたと思っていなかったね、」

流石に、あけみも黙った。

すっかり晴れ上った、夏の空である。

「遅くなってしまった、出かけるよ、出がけに、こんな話はよせばよかった、」

「だって、仲仲、あなたと話すときがないのですもの、夜はお忙しいし、」

藤井は、さっさと靴を履いている。

「実家へ出かけてもいいでしょう、」

あけみは、まだ言っている。

「いいよ、」

そのまま、良人は出ていった。

あけみの実家は、神戸に在る。両親だけで住んでいるが、屋敷は広いのである。三人の子供たち、つまり、あけみを中にして、上と下に、男の兄弟がいて、各自が、両親の所有する土地に、権利をもっていると思ひこんでいた。中でもあけみは、男兄弟よりも、両親に好かれていという気持で、なにかと言えば、両親の家に出かけた。夏休み、冬休み、必ず、猛を連れてゆくのである。藤井は、勤めもあるので、同行しても、一泊ぐらいのことであつた。

妻の不在の間、藤井は、なんとなく開放的になる。妻の実家の財産などに、関心はないが、親の財産というものを、あけみが自慢気に、頼っていることは、気が重いのである。

良人よりも、資産？　そういう女に、あけみがなっていたのは、藤井と結婚する前からのことで、会社でも、前社長の女婿としての白眼視に、良人が、知らん振りであることも、齒がゆいと言う。「あなた、お考えになったことあるの、利用出来るものが、あなたのまわりには、たくさんあるでしょう、」

「なんのことだ、」

あけみは笑いながら、

「そういうところに、わたし魅力を感じたけれど……でも、結婚した以上、もっと、どん慾な男になれると思つたのに、」

「見込みがいだったな、」

「これからだっていいわ、まだ、わたしの父は、隠然たる力があるわ、」

藤井は、そのとき、はっきり、妻のあけみが、知りあった頃の無邪気さから、我慾のつよい女に変わっていることに気づいた。

もともと、そういう性質であつたかもしれないのに、あの頃は、なんでも無邪気に振舞う女にみえたということなのである。

奈保子は、洋次を抱えあげてくれた男性の家庭を、ちらっと眺めただけであつた。それなのに、男性に、同情的な気持が湧くのをおかしく思った。

「おばあちゃま、そのおじさん、いい人だった……ばばみたいがいい人だったよ、」

「そう、ばばがお留守だって、おじいちゃまもいるし、淋しくなんかないでしょう、」

「そうだよ、おばさんの方は、そのいい人の言うことをきかなかつたよ、」

「そんなこと言うものではない、よそのお宅のことなんか、わかりませんよ、」

奈保子は、祖母に言った。

「会社の寮にいらっしゃるひと、管理人という風でもないのですけれど、」

「じゃ、社員の方でしょう、休養にきておいでなのでしょう、」

「そうね、この頃、昔の別荘が、みんな会社の寮になってしまつたわ、」

「大きい家は、必要ありませんよ、人手は使えないし、この家なんか、あんたのお父さんが、養

生に建てた家で、手狭だけれど、都合よく造作してあるから、わたしたちも、手ばなさずに、住みついていられるのよ、」

海辺から一側へだった中通りにある家には、直接、砂風も潮風も当たらないつもりなのだ。父親は、土地の風土を考えて、この場所を選んだと、奈保子は思っている。

海沿いにある、大きな別荘群と、豊かな松林が、防波堤の役目をして、その奥の、小さい住宅には、当時のままの人びとが、半分は残っている。

「べつに、いったり来たりもないけれど、御近所の様子は知れているし、年寄だけでいても、なんだか安心ですよ、」

「そうね、ここからわたしだって、わたしのお友達だって、お嫁にいたり、貰ったりで、あとは離ればなれになっても、ここに、根が残っている気がするわ、」

「おじいちゃまも、ここは気に入っています、外観は、そりゃ今風のきれいな家とはくらべものにならないけれど、ぺこぺこしたところがないって……座敷も台所も、同じに手を入れてあるからね、見栄なんて、考えないひとだった息子は、」

「でも残念、わたしが十四のとき、父は亡くなりました、だから、おばあちゃん子で、三文抜けてるらしいわ、」

「ばかをお言いでない、三文以上、十文ぐらい、得をしている筈ですよ、おばあちゃんの方が、家事にかけては専門家なのだから、」

奈保子は、わざと眉をしかめて、

「そこから、お母さまは、ゼロになっちゃうのね、お母さまも承知していたわ、とても、おばあちゃまの氣に入る嫁にはなれなかったって、」

「そうではないんですよ、いい嫁でした、でも、未亡人になって、ここに一人で暮せないから、お勤めをする為に、市内に移って、奈保子を育てたのですから、時々、おばあちゃんが、手助けにいました、」

奈保子は、母も不運なひとに思う。父のあとを追うように、奈保子が大学受験の勉強中に、病没してしまったのである。

「わたしだって、苦労もしましたよ、無理もしつづけた上に、逆縁だろう、逆縁でおわかりだろう、親が、子供に先立たれることですよ、全く、しょんぼりしたね、」

奈保子は、深くうなずいた。

それで、大学も中退して、祖父母の住む海辺の家へ帰ってきたのである。

その頃、海辺の砂浜は、今の三倍も広がった。

別荘のまわりは、二重、三重の松林で、いつも、松葉が敷物のように、厚くたまっていた。松ぼっくりを籠いっぱい拾って、お風呂の石炭にまぜて使ったのである。

松林のなかにはいると、薄荷はつかのようなすっとした空気で、頭が洗われる。オゾンが多量にあるので、鼻にいいということから、父は、松林の中に、籐の寝椅子を出して、毛布にくるまっていた。その松林が、もうない。

「漁師のおじさんたちも、見かけなくなったわ、魚売りのかつぎのおばさんも、来なくなったわ

ね、」

「そうそう、地のお魚もすくなくなった、」

「でも、自然がなくなつたなんて、すぐ言うのね、自然は変つただけだと思うわ、」

「そうだね、変つたね、でも、自然がなくなる筈はないよ、自然っていうものは、わたしたちの住んでいる全体のことだものね、」

奈保子は、祖母の言うことに教えられるような気がした。

「そうよ、変るのは仕方がないけれど、変つたつて、自然は自然で、自然がどこかへ消える筈はないわ、いつまでも変らずにいられないのだわ、人間だって、年をとるでしょう、」

「そうですよ、年をとつたつて、おばあちゃんは、それが当り前だと思っているわ、いつまでも若いままだなんて、お化けだね、」

「人魚を食べると、いつまでも若くいられるという伝説があるの、」

「不老長寿というのが、人間の願望だという言い伝えは、たくさんありますよ、なんとかの果実を探しにゆくとか、なんとかの水を飲むとか……」

奈保子は、祖母と話していると、いつまでもきりがないので、座を立った。

洋次は、近所の子供たちのそばに、たたずんでいた。仲間に入れて貰えない傍観者の立場を、なんとなく感じている風である。

「洋ちゃん、お友達にしてお貰いなさい、」

奈保子は、笑顔で近づいていった。ぱっと、子供たちは眼を向けて、ひとり、ふたり駆け出し

ていつてしまった。

「いいんだ、僕、また東京へ帰るんだから、仲間にしてくれなくなつて、」

奈保子は、砂浜をすこし歩いて、洋次と一緒に、家に戻った。もはや昼食の時間である。

「お昼でしょう、だから、みんな帰つちやつたんだ、」

「そうね、いい子たちだわ、」

茶の間に、郵便物がおいてある。奈保子は、すぐエヤメールの一通を手にとった。良人からである。彼は技術者として、南米アルゼンチンの公共事業に出張している。

みんな変りはないだろうね、仕事が遅れているので、あと、六ヶ月位かかりそう、東京の家に、おじい様たちを呼んで暮したらどうだろう、それとも、閉めて、二人で、そちらにゆくか、洋次の学校は、来年でしょう、それまでには帰れると思うけれど、二人で、それともがんなるか、僕は一緒にいる方が、安心だと思う、みんなで相談して下さい、

こちらは氣候はいい、町は東京と同じように賑にぎわっている、休日には、宿舎でスキヤキ会をしたり、野球をしたり、元気にやっています、

洋次に、絵本と、組立玩具を送るから、待っているように、万事をつけて、

奈保子様

三郎